

「後樂園・茗荷谷間 (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

菜の花の段丘崖を過ぎると、丸ノ内線はいよいよ「茗荷谷」の奥深くに入り込んでゆく。「茗荷谷」はもともと駅名ではなく、地形がそのまま地名になったものだ。神田川の支流(古茗荷谷川)が、武蔵野台地東端の舌状台地である「小石川台地」を浸食して造った、小規模な浸食谷の一つだ。



色別標高図で見ると、茗荷谷駅の手前で、谷の先端がいくつかに分岐しているのがわかる。茗荷谷駅は、その源頭(水源)の一つに位置している。拓殖大学のあたりも源頭の一つということになる。



電車に乗っていると気付かないが、丸ノ内線も茗荷谷駅に向かって、ゆるい上り勾配になっている。写真を見ても、本線よりも車両基地のほうが法面が高い。



⑦やがて、茗荷谷の車両基地(検車区)の脇を通る。この検車区は、茗荷谷の底に築堤を造って平らにし、線路を何本も敷いたものだ。従って、車両基地の線路端は、相当な高さの築堤になる。そのことは、色別標高図で見てもよくわかる。



⑧後樂園から3分ほどで、茗荷谷駅に到着。ここは、かつての神田川の支流の源頭(水源)で、両側とも切り立っていて、駅名の通り「谷」である。できるだけトンネルを掘らずに、谷の地形を利用したのだろう。崖にぶつからないよう、池袋行の電車は、すぐにトンネルに入る。このあと跡見学園門付近を通り、ビー玉の裏通り(地下鉄通り)を通過する。非常に浅いところを通っているので、時々電車が通る音が聞こえる。普段の通勤や通学も、ちょっと観察すると面白い。